緑化樹生産経営に関する研究（Ⅳ）
―緑化樹セリ市場の実態と今後の方向―

九州大学農学部　村瀬房之助

1. まえがき

緑化樹の流通形態は，庭木と公共用緑化樹によって異なる。庭木は主に個人住宅に植栽されるもので，ふりうり，植木市，小売店，造園業者が販売するものである。これらの流通業者は以前は自ら生産したもの，または生産者から直接に仕入れたものを販売していたが，近年はセリ市場から仕入れることが多くなっている。生産者，とくに農家はセリ市場の発展につれて，経営目標をセリ市場の出荷において緑化樹生産を進めている。このように，セリ市場が緑化樹生産経営に及ぼす影響は大きく，その実態と問題点の究明は重要といえる。以下，田主丸町のセリ市場を対象として分析を進める。

2. 福岡県における緑化樹セリ市場の概況

福岡県におけるセリ市場の主なものは，①田主丸町植木農協，②福岡県苗木農協，③福植ＫＫ，④久留米市植木農協，⑤筑後植木農協，⑥三井植木組合の地方卸売市場である。他のセリ市場は規模が小さかったり，花などの出荷もみられ，緑化樹専用のセリ市場とはいえない。①，②，③は浮羽郡田主丸町にあり，⑤は筑後市一条，⑥は小郡市松崎にある。各市場とも昭和40年代に急速に発展したものである。③以外は農協組織である。売上高を昭和52年度でみると，田主丸町植木農協は18億円，福岡県苗木農協1億2,500万円，福植4億円，久留米市植木農協5億3,000万円，筑後植木農協3億5,000万円，三井植木組合2,700万円となっており，田主丸町植木農協の売上高が圧倒的に大きい。これは全国のセリ市場のなかでも最高である。

3. 田主丸町植木農協セリ市場の実態分析

年間売上高が18億円にも達し，九州・山口一円の庭木流通に大きな役割を果している田主丸町植木農協のセリ市場を，①出荷者と買参人の地域分布，②出荷樹種と本数，③価格形成に焦点をあてて分析すると，以下のとおりである。

1） 出荷者と買参人の地域分布

田主丸町植木農協のセリ日は，毎月5，10，15，20，25，30日の月6回行なわれている。そこで，昭和53年10月20日の大市について明らかにすると，出荷者総数は903人である。福岡県は814人，県外は89人となっている。県内は31の市町村に分散している。最多は田主丸町の606人，つづいて久留米市の89人，吉井町35人，甘木市25人，朝倉町11人，あとの市町村は太刀洗町の9人をはじめ10人以下である。県外は熊本県40人（菊池郡泗水町7人が最高），鹿児島県27人（出水市14人，出水郡高尾野町7人が上位である），長崎県8人，大分県6人，佐賀県3人，その他5人となっている。

以上に対し，買参人は福岡県内346人，県外178人合計524人である。県内は51市町村に分布する。田主丸町の134人が最も多く，ついで福岡市の38人，北九州市34人，久留米市23人，甘木市11人，田川郡川崎町11人，あとは朝倉町9人をはじめ各市町村とも10人以下となっている。福岡市と北九州市の買参人は造園業，小売業が多く，とくに北九州市からは小売業者が仕入れに来ている。県外で買参人の最多の地域は熊本県で41人，ついで山口県36人，大分県27人，長崎県23人，鹿児島県20人，佐賀県14人，宮崎県7人，その他は広島県安芸郡2人，香川県高松市2人，岡山県井原市2人，島根県斐川町1人，愛媛県今治市1人，沖縄県1人，千葉県八日市場市1人である。1つの市町村における最多数は熊本市の7人である。したがって県外の買参人は，1カ所に少数，しかし広く分布している。

2） 出荷樹種の本数と価格

昭和53年10月20日の大市の出荷本数は43,780本，その売上高は4,226万円であった。一部には緑化樹以外のものも出荷されているが，出荷樹種は約100種類に達している。それらのうち出荷本数，売上金額の大きい主要樹種は，①ツゲ類，②マツ類，③マキ類，④サザンカ，⑤ヤマモモ，⑥モチノキ，⑦ツツジ類，⑧カイズカイブキ，⑨ヒイラギ，⑩ウメ，の10種類である。

そのうち，売上高の最も多いのはツゲ類（4,252本）で，8,649,690円であった。ついでマツ類（2,175本）の8,113,550円，マキ類（1,069本）の4,453,400

円，サザンカ（6,864本）の2,446,630円の順となっている。ツゲ類，マツ類で売上高の40％，3位のマキ類を加えると50％を占めている。サザンカ，ヤマモモ，モチノキ，ツツジ，カイズカイブキ，ヒイラギ，ウメまで入れると全売上高の78.6％に達している。

ここで，ツゲとツツジの価格と出荷本数について述べると，ツゲはイヌツゲ，マメイヌツゲ，キンメツゲが玉ツゲ，段ツゲ，枝ツゲの形で出荷されているが，1本当りの価格は最低50円から最高23万円までみられる。価格とそれに対応する出荷本数は，500円までが3,177本，600円が83本，1,500円が53本，2,000円が73本，3,500円が72本，5,000円が55本となっている。しかし，金額的にみると，単価500円までの出荷本数は全体の約74％を占めながらその合計金額は77万円と低く，ツゲ類売上高の8.9％を占めるにすぎない。これに対して，単価5,000円から23万円までの出荷本数の合計はわずか289本であるが，その売上高は全体の67.3％にも達している。

ツツジ類には，キリシマ，ヒラド，ヨドガワ，ドウダン，クマノなどの品種がみられる。最低価格は1本10円がみられ，最高は15万5,000円と価格帯はツゲ，マツ，マキ，サザンカ，モチノキよりも低い。価格帯別出荷本数をみると，単価500円までが4,913本で106万円，500～1,000円が448本で34万5,000円，1,000～5,000円が106本で17万9,000円，5,000円以上は10本で10万円に達している。

つぎに，春と秋のセリ市を比較するために，昭和53年3月15日の大市を分析すると，出荷樹種は140種類を数えることができる。出荷本数は106,539本，売上高5,727万円であった。これらはさきの10月20日の大市よりも大きく上回っている。その内訳はマツ類が第1位，1,346万円で全体の23.5％を占める。ついでツゲ類885万円（15.4％），ツツジ類504万円（8.8％）とつづいている。出荷者1,155人，買参人731人とこれらも10月20日の大市を上回っている。したがって，春は秋よりも緑化樹の荷動きが大きいということができる。

4. 緑化樹セリ市場の問題点と今後の課題

以上の分析から，田主丸町における緑化樹セリ市場の実態をほぼ明らかにすることができた。それを要約するとつぎのとおりである。セリ市場には，ツゲ，マツ，マキなど主として庭木用の緑化樹が出荷されているが，それらには単価の低いものから高いものまでみられる。しかし，同一樹種，同一規格の大量取引は行なわれていない。そして，町内にセリ市場が3つも存在することから，それらの統合が大きな課題となっている。

ところで，近年における緑化樹の大量需要は，公園，道路などの公共施設に植栽することを目的としたものである。したがって，公共用緑化樹が大量需要の中心となっている。その公共用緑化樹の流通は，これまで卸売業者によって担われているが，卸売業者は，特定の同業者間で閉鎖的な取引関係を確立しているので，新規の取引は極めて難しい状況にある。このことから，卸売業者に対抗しうる農協組織のセリ市場が庭木のみでなく，公共用緑化樹を取扱いの対象とすることが，その安定供給に寄与すると思われる。

しかし，セリ市場は，緑化樹の特性である重厚性のために，集荷場に広い敷地面積を要し，大量出荷には限界をもっている。そのことから，セリ市場が同一規格，大量取引の公共用緑化樹を取扱い発展するためには，見本取引を採用し，充実させることが必要と考えられる。

参考文献

(1) 西澤正久，村瀬房之助：福岡県における緑化用樹木の生産量と供給の実態調査報告書，18～24，1981